岩手県大槌町における地域の記憶の継承と地域アイデンティティの紡ぎ直し

―災害過程における地域生活のビジョンの個別化と集合化のはざまで―

○早稲田大学　野坂　真
早稲田大学　浦野正樹
早稲田大学　川副早央里

１　目的

本研究の目的は、次の２点である。第一に、災害過程の各段階において生じている様々な営為の連なりを、各住民層が持つ地域生活のビジョンの個別化と集合化が同時に進んでいく過程として整理し直すことである。第二に、何が個別化と集合化それぞれの決定要因となっているのかを考察することである。要因は、各住民層における社会生活の基盤、家計経済や生活資源の調達、ケアなどの扶助のしくみを再構築する上での選択が、地域全体の存続戦略や、それを具体化したコミュニティ機能に影響していくメカニズムを、地域の記憶の継承と地域アイデンティティの紡ぎ直しに向けた動きと関連させながら検討していく。また、地域の＜中心―周縁＞構造を念頭に、周縁部における地域の記憶の継承と地域アイデンティティの紡ぎ直しに向けた動きが、地域全体の復興方針といかなる関係を持つかにも着目する。

２　方法

文献、新聞記事、行政、地域組織、文化活動団体の報告資料、現地でのヒアリング結果等を基に、東日本大震災（以下、震災）で大きな被害を受けた岩手県大槌町を中心とした事例分析を行う。具体的にはまず、災害過程における住民層ごとの地域生活ビジョンの変遷を把握する。住民層のカテゴライズは、生業、家族生活（育児・介護など）など生活を成り立たせる上で必要となる要素の組み合わせ方に注目して行う。次に、地域再建の担い手となる地域組織（自治会・町内会、復興協議会、地元企業のグループ、地元ＮＰＯなど）や文化活動団体（伝統芸能保存会、サークル、支援団体など）による活動の内容、理念などを把握しつつ、地域生活ビジョンと、地域全体の存続戦略や地域の記憶の継承と地域アイデンティティの紡ぎ直しに向けた動きとの相互関係を明らかにする。

３　分析結果

震災前、地域経済の停滞が深刻化していく中で、生活の拠点が分散していく傾向があり、生業、育児、介護など住民の多くが共有する地域課題であるはずの事柄が、個々の生活課題として親族関係などパーソナルな部分で担うことが多くなっていた（地域生活ビジョンの個別化）。他方、祭りや地域行事により、特に周縁部では、地域住民の多くが同じ活動に参加することで地域アイデンティティは維持されていた。震災後、避難所から出て生活再建を開始する段階では、個々の生活課題への対応が優先され、地域生活ビジョンの個別化がより顕著になった。しかし同時に、産業団体や文化活動団体などにより地域アイデンティティの再確認が行われる中で、震災前とは別の形での地域生活ビジョンの集合化に向けた動きも生じてきた。現在、特に沿岸地域において人口減少と高齢化が顕著である。震災前と同様にパーソナルな部分だけで生活課題に対処することは困難になりつつあり、コミュニティ機能を確保するため、地域生活ビジョンの集合化が重要性を増している。

集合化に向けた取り組みの例として、安渡地区では防災をテーマに、様々な営為が派生してきている。2012 年６月に始まった安渡防災検討会では、震災当時の避難行動と避難所生活を検証することで経験を集合化し、その結果を地区防災計画や避難所機能を備えた公民館という形でシンボル化した。また、発災から現在までの災害過程の検証を、震災前の地域生活や地域振興にまでさかのぼって行う取り組みとして、安渡地域アーカイブ活動や生きた証プロジェクトなども進めてきた。これらの取り組みは防災を出発点としながらも、震災前の地域の記憶やアイデンティティを紡ぎ直し、震災後に生じてきた、各住民層での個別化と集合化の萌芽を読み解くことにつながりつつある。

このように、集合化のダイナミズムは見え始めており、地域の記憶の紡ぎ直しも始まっていると言える。今後、それが継続してくかどうかを分析するためにさらなる調査が必要である。